

# 茶々姫芳心院と妙行寺木造日蓮坐像について

## ～鳥取藩祖池田光仲夫人の法華信仰～

伊藤 康晴\*

### はじめに

本稿は江戸前期に生涯を送った芳心院（1631～1708）の法華信仰について概観し、芳心院が「刻彫」した寛文6年（1666）の墨書銘をもつ妙行寺の木造日蓮坐像（以下、「坐像」と略す）について紹介することを主な目的としている。

芳心院は因州鳥取藩祖池田光仲（1630～1693）の正室で、本稿で取り上げる坐像は神奈川県茅ヶ崎市松林の妙行寺に安置されている。天保12年（1841）に成立した官撰地誌『新編相模国風土記稿』室田村・妙行寺の項に「芳心院彫刻して看経仏とせし物と云ふ」と見え<sup>(1)</sup>、坐像の体軀、様態、墨書内容を勘案すると、芳心院が日常的に拝した持仏で間違いないものと判断される。坐像の由緒に相応しい豪華な造りであり、大名家夫人、女性の信仰生活を物語る資料としても大変貴重である。

本稿では先行研究に学びながら<sup>(2)</sup>、芳心院の願意・信仰をたどり、坐像成立の背景と藩主家に与えた影響についても展望しておきたい。

まずは鳥取藩政確立期の池田氏菩提寺院とその宗門について概要を確認しておく必要がある。

### 1. 鳥取藩主家池田氏の菩提寺

池田氏は、藩祖光仲の曾祖父池田恒興（1536～1584）以来、臨済宗妙心寺派の寺院に弔われた。菩提寺は池田氏の国替えの度にその城下に引き寺されており、本貫地とされる美濃国池田（龍徳寺）をはじめ、同国岐阜（広徳寺）、三河国吉田（広徳寺・龍峯寺）、播磨国姫路（国清寺）、淡路国洲本（江国寺）、備前国岡山（国清寺・清泰院）などに系譜を同じくする臨済宗寺院が造立された。

当家における江戸期最後の国替えは寛永9年

【系図1】鳥取藩主家 池田氏略系図



（1632）である。備前・備中31万5,000石から因幡・伯耆32万石に国替えされ、幼少3歳の光仲が鳥取藩主となる。その後は明治期の廃藩までの約240年間、所領を替えることなく、光仲の子孫が因・伯の2国を領有した。

鳥取城下には臨済宗妙心寺派の龍峯寺が建立され、光仲の祖父池田輝政（1564～1613）以来の位牌を安置して菩提寺としたが、寛文8年（1668）頃より藩主光仲は妙心寺派から黄檗派（のちの黄



【写真1】国史跡 鳥取藩主池田家墓所

槃宗)に傾倒していく。京都の本山妙心寺は、龍峯寺の離脱を認めず幕府へ出訴に及んだが、光仲の晩年に和解する。そして光仲没後に龍峯寺を妙心寺に返上し、別に黄檗派の菩提寺院興禅寺を建立することが取り決められた。光仲が没したのは元禄6年(1693)のことで、黄檗派になった儒教式による埋葬がなされ、3回忌を過ぎて墓塔も造立された<sup>(3)</sup>。

藩主歴代の墓所は、鳥取城跡から4キロ余り南東に位置する鳥取市国府町奥谷(旧因幡国法美郡奥谷村)にある。現在は「鳥取藩主池田家墓所」として国の史跡になっている。藩祖光仲の死去にともない造られたわけであるが、光仲の墓塔は儒教式の墓塔にしばしば見られる亀趺と称される台座に据えられている。こうした様式は、2代藩主綱清を例外にするが、3代から11代の歴代藩主に受け継がれ、みな亀趺円頭型の墓石となっている。亀に似た鬘頂と称される古代中国の伝説上の霊獣の台座に墓塔頂部の丸い位牌型の石塔を載せた墓石が一定の間隔を保ちながら山間谷筋に整備されている姿は壮観である(写真1)。

元禄期以降の鳥取藩主家及び分知家(分家)歴代の宗旨は臨済宗黄檗派ということになる。墓所は当時「御廟所」と称された。黄檗僧ゆかりの庵寺を前身とする清源寺(興禅寺末)を光仲没後に開山し、以後墓所を管轄した。



【写真2】永寿院の芳心院墓所

## 2. 芳心院茶々姫について

芳心院は、寛永8年(1631)江戸の紀州徳川家の藩邸において第1女として誕生。茶々姫と称された。父は徳川家康の10男徳川頼宣、母を加藤清正の娘・瑤林院(八十姫)とするが、生母は側室中川氏といわれている<sup>(4)</sup>。祖父清正と母瑤林院は篤く日蓮宗(法華宗)を信仰したことで知られ、さらに父頼宣の母は徳川家康の側室養珠院(お万の方)であり、法華信仰の聖山で、女人禁制であった七面山(身延山久遠寺の西方)に初めて入山・登拝した女性として知られている。芳心院は熱心に日蓮宗を信仰する血筋に生誕しており、日蓮法華信仰に強く影響を受けた女性と言えるであろう。成長した茶々姫は、幕府の命により池田光仲と縁組し、正保2年(1645)4月18日、15歳で婚儀を行なう。一方の藩主光仲は1歳年長で寛永7年に誕生。同9年、父忠雄の死去にともない国替を命じられ、同時に家督を相続した。茶々姫との婚姻は16歳となる。光仲は徳川家康の曾孫、茶々姫は孫にあたる。婚儀の翌々年、正保4年に嫡男新五郎(綱清)が、慶安3年(1650)には次男仲時(仲澄)が誕生している。

芳心院の日蓮宗への帰依は、すでに見たように紀州家の信仰に負うところが大きいものの、2人の子供の成長を願う信心から深められていった要素もある。のちに2代藩主となる綱清は病弱であり、平癒を祈願する母芳心院の信仰活動として諸記録に確認される。



【写真3】長源院(千両塚)と慶春院の墓所

東京都大田区にある池上本門寺(日蓮宗)は、紀州徳川家の菩提寺の一つであるが、芳心院は生前、塔頭永寿院に逆修供養のため寿塔(宝塔型)を造立したことで知られ、生前に法名「芳心院妙英日春」を授けられている。寿塔は元禄期の初め頃に造営されたと推定されており、南北26.3メートル。東西22メートル。幅2メートルの空堀を廻らし、没後は仏舎利を安置して巨大な墓域とされた。現在は「芳心院墓所」と称され、昭和50年(1975)に大田区有形文化財(史跡)に指定されている(写真2)。平成16年(2004)～同19年(2007)には大規模な発掘調査が実施されて全貌が明らかにされた<sup>(5)</sup>。築造に一万両かかったと伝承され、一般に「万両塚」と通称されている。

このほか池上本門寺には、慶安2年(1649)に18歳で死去した池田光仲の弟仲政(本高院)と、2代藩主綱清の正室、式姫(長源院)の墓(写真3)があることを補足しておく<sup>(6)</sup>。芳心院ならびに長源院らの墓石は、本門寺山内では紀州徳川家関係者のみに用いられた宝塔形式であることが指摘されている<sup>(7)</sup>。

### 3. 妙行寺木造日蓮坐像

芳心院の持仏、木造日蓮坐像の伝来する妙法山妙行寺は、相模国高座郡室田村、現在は茅ヶ崎市松林の行政区域に位置している。江戸時代は鎌倉比企谷妙本寺の末寺であった。写真4-1・4-2から



【写真4-1】坐像正面

わかるように右手には笏を立て、左手で経巻を掴み、五条袈裟・僧綱襟姿の日蓮聖人の説法像である。面貌は池上本門寺大堂の日蓮聖人坐像(国重要文化財)を意識して製作されているという<sup>(8)</sup>。像高27.4cm、臂張20.4cm、袖張30.6cm、寄木造の小ぶりな像で、玉眼が嵌められている。豪華な彩色に截金を多用した文様を随所に施す傑出した造りである。仏師は不明であるが、坐像背面と厨子扉にある墨書が坐像の由緒・来歴を明らかにしている。

坐像の墨書は以下の通りである。

#### 【坐像背面墨書】

武運長久・子孫繁栄・現当二世成就祈  
 功德主紀大納言頼宣卿御息女  
 松平相模守殿  
 北方法号芳心院  
 南無妙法蓮華経 南無日蓮大菩薩  
 妙英日春 敬白

日豊(花押)

[ ] 両山十九世 大僧都  
 寛文第六丙午年  
 正月如意□日

寛文6年(1666)「両山十九世大僧都」日豊による開眼墨書銘を坐像背面全体に遺している。「両山」とは池上本門寺と鎌倉妙本寺のことで、一人の貫



【写真4-2】坐像背面





【写真 4-3】 芳心院直筆の題目



【写真 4-4】 木造日蓮坐像の厨子

首が両山を統括したとされる。坐像は芳心院が生前信仰した「両山」との縁から、かつて妙本寺の末寺であった妙行寺に伝来したと理解される。池田氏の武運長久・子孫繁栄の願いにより、また「現当二世」すなわち嫡男綱清についての祈念のため造立されていることがわかる。光仲 37 歳、芳心院 36 歳、綱清 20 歳の時である。

坐像は首の部分の外れ、首の中には包紙によって筒状に包まれた芳心院自筆を含む題目 334 遍と、芳心院に仕えた侍女たちの唱題遍数を書き上げた巻紙の 2 点が挿入されている。題目の末尾にある芳心院の法名「芳心院妙英日春」は自署とみられ、現存する数少ない筆跡となっている<sup>(9)</sup>。

厨子も豪華である。屋根には華鬘や幡が装飾され（一部欠損）、扉には以下のような墨書がある。

【厨子扉墨書】

〈左〉

紀伊大納言頼宣卿御姫松平相州光仲室

法名 芳心院殿妙英日春大姉

奉刻彫之

比企谷末相州高座郡室田村

妙法山 妙行寺 常住

〈右〉

平日不可奉開於御扉

御身後代不可奉於彩色

元文第三戊午年十二月吉日 日顛掟

賜紫 両山

南無妙法蓮華經 日顛(花押)

冒頭で触れたように、厨子左扉の墨書の内容から坐像は芳心院による「刻彫」を施したものと理解できる。墨書をのこした日顛は両山 25 世にあたる人物で、後述するように芳心院没後においても芳心院らの奉納した法華経を修補するなど、その所願を後世に遺すことにつとめている。この厨子も同様で、坐像の取り扱いについて、平時は厨子の扉を開けないこと、御像は後代に至っても彩色を加えないこと、すなわち原形態を変えず、当初の彩色や日豊の墨書をそのまま遺すことを厨子扉に記した。坐像の開眼から 72 年後の元文 3 年（1738）のものである（芳心院没後 30 年）。おそらくは当年に日顛聖人が厨子を新調したのではないかと思われる。

以上見てきたように、妙行寺に伝来する芳心院持仏の坐像は、芳心院の信仰活動と相俟って来歴の明らかな大名家夫人の持仏として大変貴重である。

#### 4. 芳心院日蓮法華信仰の足跡

江戸周辺の日蓮宗寺院に遺されている芳心院の足跡をたどり、信仰・願意の内容について確認し



【写真5】朗惺寺所蔵 妙法蓮華経 第8(巻末)

て坐像の存在についての理解を深めたい。なお資料の所在については、池上本門寺霊宝殿の作成した展覧会図録『万両塚』に負ったことをあらかじめ明記しておく。

芳心院の信仰活動は、すでに触れたように嫡男新五郎輝高のちの2代藩主綱清(1647~1711)の病氣平癒・除災を祈念するかたちでしばしば登場する。中でも最も古い事例となるのが東京都品川区小山にある朗惺寺に蔵される紺紙金字の妙法蓮華経(全八巻)である(写真5)。慧明院日伸により万治元~3年(1658~1660)にかけて3年がかりで書写されたもので、当初は池上本門寺に奉納されたとみられる。綱清が12~14歳、芳心院28~30歳の時で、妙行寺の坐像成立の6年余り前に当法華経は成立している。

写経は巻六の「如来寿量品第十六」から着手された。久遠実成の釈迦を説いた「法華経」の中でも真髓とされる品からの写経であり、奥書は万治元年12月8日であるから、釈迦が悟りを開いたとされるいわゆる成道会の日付になっている。

当法華経は巻頭・巻末には坐像と同様、両山19世大僧都日豊の銘をのこしている。金泥の奉加には駿州富士郡三澤寺實成院日相、比丘尼玄妙院法要日唱の名がみえる。實成院日相聖人は芳心院・綱清にゆかりの深い七面大明神を祀る大久保光清寺(のち法善寺)の開基であり、芳心院の出家取立をなして法名を授けた人物である<sup>(10)</sup>。

法華経第8の巻末には以下のようにある。

松平新五郎当病平癒・武運栄久矣

功德主 祖母瑤林院日芳

母公芳心院日春 敬白

武州池上長栄山本門寺 常住

万治三庚子季卯月吉日 日豊(花押)

功德主(施主)は、新五郎の母芳心院と祖母にあたる紀州徳川家瑤林院(八十姫)の連名であることが注目される。両者にはすでに法名が授けられている。御家をこえて祖母瑤林院も功德主になっているのであり、いわば新五郎(綱清)の母方の系譜から本門寺日豊聖人を頼んで新五郎の病氣平癒などが祈願されているのである。この半年余り前、5月に新五郎(綱清)は江戸屋敷で疱瘡に罹っている<sup>(11)</sup>。法華経書写の直接的な動機は疱瘡の治癒にあったはずである。この他芳心院が息子の息災を願うものに、妙行寺の本寺である鎌倉妙本寺宝蔵修補の棟札の中にも見られる<sup>(12)</sup>。

すでに見たように日豊聖人は妙行寺の坐像の開眼墨書銘を書いた人物である。法名を授けた日相聖人とならんで芳心院の信仰に強い影響を与えた。法華経を唯一の経典として重んじた日蓮宗の信仰が、御家をこえ、また御家の宗旨をこえて母方女性の系譜に受け継がれていることを示す好例であろう。加えて「法華経」の提婆達多品第12の説く「女人成仏」の信仰を継承する姿であると言えは言い過ぎにならうか。しかしながら母から娘へ受け継がれた信仰が芳心院の在家出家に繋がっていることは間違いないはずで、日相聖人から茶々姫に「芳心院」の法名が授けられたのはあるいはこの頃、嫡男の病気に直面した万治期のことであったかも知れない。

鳥取池田家に嫁いだ後もこうした関係性を持続した瑤林院と芳心院であるが、瑤林院は当法華経奉納(万治3年)から6年後の寛文6年(1666)

正月 24 日に没している。妙行寺の坐像の開眼供養も同年正月(日不明)である。坐像の墨書には「武運長久・子孫繁栄・現当二世成就祈」とあり、母瑤林院に対する供養の願文は見られないのであるが、年月の一致は偶然であろうか。

また法華経第 8 巻の末尾には、奉納から 71 年後の享保 16 年(1731)、日顛聖人によって法華経が修補されたことが記されている(写真 5)。芳心院没後 23 年を経ている。当法華経は元々卷子に仕立てられていたことがすでに指摘されており<sup>(13)</sup>、現在の折帖に仕立てられたのは、この時ではないかと考えられる。当法華経も妙行寺の坐像と同様、日顛聖人による保存措置が講ぜられており、芳心院との関係の深さが知られるが、年齢差のある両者のつながりは不明であり、引き続き課題としなくてはならない。

芳心院の法名を授けた日相聖人開基の大久保法善寺は、江戸期は池上本門寺の末寺である。芳心院・綱清ゆかりの七面大明神像(以下、「七面像」と略す)を安置しており、その由来を記した延宝 7 年(1679)「武州豊島郡大久保村法善寺七面大明神縁起」(以下、「縁起書」と略す)を伝えている。七面明神は日蓮宗の守護神の一つとされている。

鳥取藩政資料にある光清院(法善寺)の由緒書に従えば、綱清の病に手を尽くした芳心院は日相聖人を頼り、「身延山之嶽」(七面嶽)における丹誠なる祈念でようやく癒えたとする。芳心院の信仰は日々増して、七面明神が芳心院によって勧請され延宝 6 年(1678)に寺院一字を建立したとする。その際に芳心院の法名の「春」、芳心院次男仲時の「時」、光仲の「光」、綱清の「清」の諱から一字宛集めて「春時山光清院」と名付けられ、祈祷料百石が寄付された<sup>(14)</sup>。

縁起書はその翌年正月の年紀を有している。作者は「春時山光清院法善寺常什 日幸(花押)」とある。縁起書には芳心院・綱清の信敬により駿州富士郡三澤寺に安置していた七面像が法善寺に



【写真 6】法善寺の七面明神像

「降臨」したと表現されており同時代の記録として重要である。三澤寺には芳心院が願主となり、日相聖人が開眼供養した貞享 4 年(1687)の納経供養塔が存在する<sup>(15)</sup>。

写真 6 が法善寺の七面明神像である。昭和 60 年(1985)に新宿区有形文化財(彫刻)に指定されている。江戸で最初に祀られた七面像といい、境内には「七面宮」が祀られていた(江戸名所図会)。指定書によれば、中正院日護聖人(1580~1649)の作と伝えられている。日護聖人は紀州徳川頼宣に招かれ、家康 33 回忌に養珠院(お万の方)がおこなった和歌浦妹尾山題目宝塔造立に深く関与しているとして紀州家との関係が深いという(『万両塚』)。



七面天女の衣装の彩色は金泥や朱で彩られて豪華であり、截金を多用した文様構成は、先にみた妙行寺坐像との類似性を感じる内容である。

なお同寺院の墓所には芳心院 13 回忌に侍女が功德主として造立した享保 5 年(1720)の供養塔があるほか、芳心院の次男池田仲澄(東館池田家初代)夫人、兼子(涼月院)が元禄 7 年(1694)に当寺院に葬られるなど、当院も池上本門寺と並んで池田家と縁の深い寺院であると言えるであろう。

## おわりに

すでに述べたように、鳥取市国府町奥谷にある国史跡・鳥取藩主池田家所の歴代藩主の墓石は「2代藩主綱清を例外」に亀趺の台座に墓石が建てられている。幼少期から青年期にかけて病弱であった綱清は、母芳心院より病氣平癒などの祈願を度々かけられ、それは篤い法華信仰に基づくものであった。本稿で取り上げた妙行寺木造日蓮坐像もこうした芳心院の信仰により造像され、今に伝えられたものであることが理解されるであろう。

綱清の墓石のみが亀趺ではなく、開蓮華が四面に大きく陽刻された台座を採用しているのは、初代光仲とは異なる信仰が墓塔に投影された結果であり、それが母芳心院の法華信仰の影響である可能性が高いことを指摘しておきたい。歴代藩主の墓塔が定式化の傾向を強めるのは 3 代吉泰からであり<sup>(16)</sup>、初代光仲・2代綱清の墓塔のあり方、とりわけその台座形式には、個の宗教的志向が色濃く滲んだものと考えている。

芳心院の国許の墓塔は鳥取東照宮に近い芳心寺(日蓮宗)にある。鳥取城下を一望する高台に建つが、江戸の墓地万両塚とは対照的に質素な作りである。四角い台座に円頭位牌型の墓塔である。芳心院が 78 歳で他界した 3 年後に息子綱清は 65 歳でこの世を去るが、綱清の墓塔は母のものと同く似ている。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

筆者は鳥取市歴史博物館に勤務しています。鳥取藩主夫人芳心院ゆかりの坐像が生まれ故郷に伝来していることに不思議な縁を感じていましたが、なかなか調査に赴けず、3 年前に妙行寺様のご好意で坐像調査の機会をいただきました。

2020 年、新型コロナウイルスの流行で帰省できず、計画していた再調査は叶いませんでしたが、このたび中間的な報告として小稿をまとめた次第です。本文中に示した通り、まだ課題は多く今後も引き続き芳心院の法華信仰について調査したいと思います。

最後になりましたが、本稿を作成するにあたり、妙行寺鈴木錬恵ご住職には格別の御配意を賜りました。芳心院ゆかりの資料の調査におきましても朗惺寺様、法善寺様、永寿院様、鎌倉妙本寺様、鳥取芳心寺様、池上本門寺霊宝殿安藤昌就氏・本間岳人氏、鳥取藩主池田家墓所保存会高橋章司氏にお世話になりました。

また本誌掲載にあたりましては、東哲郎氏、茅ヶ崎市文化生涯学習課の永島陽子氏、茅ヶ崎市文化資料館の須藤格氏にお世話になりました。皆様に厚くお礼申し上げます。

## 註

(1)『新編相模国風土記稿』第三輯 卷之六十 高座郡二 室田村。当項目に「松平相模守光仲が後室芳心院」とあるが、「後室」は誤りである。

(2)皆川祥子「茅ヶ崎の日蓮像」『茅ヶ崎市史研究』第 3 号。

不変山永壽院『不変山永壽院芳心院殿妙英日春大姉墓所の調査』2009 年。

池上本門寺霊宝殿『万両塚』2012 年

(3)伊藤康晴「鳥取藩祖池田光仲墓所の造立過程と泉州石工」『鳥取県立博物館研究報告』第 57 号、2020 年

(4)『鳥取藩史』第一巻、158 頁

(5) 前掲、『不変山永壽院芳心院殿妙英日春大姉墓所の調査』

(6) 池田仲政の墓は鳥取池田家の江戸における菩提寺(弘福寺)成立以前のこと、墓所も紀州徳川家墓地に隣接した地にあることから、茶々姫(芳心院)輿入れ以後の紀州家との関係から当地に葬られたと考えられる。式姫(長源院)は盛岡藩南部重信の第1女。寛文10年(1670)に綱清と婚儀をあげている。子はなく東館池田仲澄の長男を養子とする(のちの3代藩主吉泰)。元禄11年(1698)に50歳で死去した。法号は長源院妙性日秀という。南部家は同じ宗旨ながら門流の異なる法華宗で品川本光寺を菩提寺にしていたが、芳心院の思し召しにより本門寺に葬られたとされ、芳心院の万両塚に対して千両塚と通称される。墓は永寿院が管理した。隣には長源院の娘、遊姫(慶春院)の墓がある。

(7) 前掲、『不変山永壽院芳心院殿妙英日春大姉墓所の調査』54~55頁

(8) 前掲、『万両塚』28頁

(9) 鳥取県立博物館所蔵「芳心院書状」(池田仲澄宛)鳥取藩政資料14434

(10) 鳥取県立博物館所蔵『江戸寺社・日光安居院』「光清院」鳥取藩政資料6479

(11) 「因府年表」『鳥取県史』7所収、1976年

(12) 寛文3年(1663)の銘をもつ鎌倉妙本寺宝蔵修補棟札には以下のようにある。

「宝蔵修補之大檀那松平綱清公・令弟仲時公母堂、  
両君武運長久・攘災延寿之懇所也

寛文第三癸卯年八月吉祥日 本行院日勝記之」

寛文3年は綱清17歳、仲時(のち仲澄)14歳。宝蔵修補の大檀那は母芳心院であり、鳥取藩の財力で賄われたとみられる。妙本寺に伝来する棟札は、母芳心院の子供の成長を願う姿を伝える内容と言える。末尾にある本行院日勝は、妙本寺と本門寺(両山)は1人の住職が統括していたので、妙本寺の寺務職を本行院日勝が管理していたもの

とみられる。

(13) 『万両塚』26頁

(14) 前掲、『江戸寺社・日光安居院』「光清院」

(15) 前掲、『万両塚』24頁

(16) 前掲、註(3)と同様。

\*鳥取市歴史博物館 主査学芸員